（学位第３号様式）

学　位　論　文　要　旨

氏　名	李錦東
題　目	食料貿易に関する理論的実証的研究 ―韓国と日本における厚生効果を醸成する食料貿易― (The theoretical and empirical research of food trade - Food trade could generate welfare effect in South-Korea & Japan-)

今日、韓国・日本両国における農業分野は、FTA 議論および WTO などの議論の際、協議の足かせになっているようにとられがちである。農業貿易の自由化が進むと、両国の農業も海外進出などの積極的な対応がありえるが、両国の農業環境は、農産物純輸出国に比べ劣位に置かれている。また、両国は国際農産物市場からの輸入量も大きく、さらなる貿易自由化は、多大な危機感を抱かざるを得ない。

しかしながら、両国は、農産物及びその加工品を輸入すると共に（少量ではあるが）輸出しており、その貿易を通じて、農業基盤の維持・拡大ができたケースがある。両国の厳しい農業の環境下、貿易を通じて農業の基盤維持・拡大することは、両国農業へ１つの大きなインセンティブを与えている。

韓国は、1990 年代から農産物輸出振興策をとっている。一方、農産物輸入のセンシティブな品目に関しては、強く反発が起こっている。その背景には、農民の職業維持、農業の多面的な機能維持、食料安保確保という意識がかかわっている。

日本の農産物平均関税は、世界的に低く、12%になっており、多様多量に農産物が輸入され、国民の厚生を向上しているようにもみえる。しかし、それは、食料の自給率低下につながり、食料安保の危機感をもたらせているのも事実である。そこで、一方では、食料安保を保つための食料自給率向上が叫ばれている。

その打開策の１つに、農業分野輸出増加を図る案がある。両国の人件費と土地利用料は、農産物純輸出国より格段と高いが、両国の生産者は一部の高品質の農産物を作っており、その商品を世界市場供給している。

グローバル化の時代、食糧問題は、地球レベルでの検討こそが重要である。市場原理主義や比較優位理論基づく自由貿易論の拡大により、福祉予算の縮小などを行う小さな政府へ向かっており、その中で効率的な農業保護策が必要である。単なる保護になってしまうと、その費用だけが浮き彫りになり、負担としてみなされやすい。

工業国には、農業分野の生産性と工業分野の生産性には格差が生じることによって、農業分野は、貿易理論上比較劣位に置かれることは、再度言うまでもない。しかし、農業も、重要な経済活動であり、その利益を従事者や国民が共有しているコンセンサスが形成されれば、より理想的な環境を作り上げることができる。しかし、農業分野も農業各分野の技術革新などによる競争力強化が必要であり、それは、世界の厚生効果上昇に繋がる。輸入品によって収縮されている国内市場だけ甘んじるのではなく、新市場の開拓も考える必要がある。

両国の GNP に占める農業分野の割合は、年々減少しているが、工業分野とサービス産業がより高い成長を成し遂げているからである。農業は、その割合が低くなっても国民の食料の調達にかかわる重要な産業であることに変わりはない。国内の食料安保観点だけではなく、世界厚生の観点から再検討する必要がある。

有限な資源の地球レベルでの効率的な利用と世界レベルの持続可能な発展のために、工業国である韓国・日本の農業が、どうすれば、世界の厚生に貢献しながら、各国の農業を維持していくことができるかである。

（学位第３号様式）

学 位 論 文 要 旨

氏　名	LEE GEUMDONG
題　目	The theoretical and empirical research of food trade - Food trade could generate welfare effect in South-Korea & Japan- （食料貿易に関する理論的実証的研究―韓国と日本における厚生効果を醸成する食料貿易―）

In this thesis, it was reconsidered about the agricultural trade of developed countries in the East Asia. Agricultural trade, it was how to affects their countries. There are two kinds of effects, it is negative and positive.
Nowadays it is extensively disputed about FTA, when the agricultural sector regard as stumbling stone their countries FTA negotiations. The agro-trade makes their countries farmer get rid of their job or lessen their wealth and welfare. We know about the free trade it is most effective system in the world in principle. But it is not accomplished in the world, because there are many obstacles and many countries politic strategies. And we should know about, there are many condition about laissez-faire, and it cannot cleared the condition. So every country negotiated with other countries in the international convention, and they seek for their national interests. And it was concluded in proportion of their negotiation power and their theories. Nowadays it is argued about WTO' s agricultural trade condition, and it is too tough road reach the conclusion.

If we cannot import the agricultural products, two countries public welfare lessened dramatically. We know about their agricultural are very severe condition also, because of imported agricultural product' s low price. If their country opened all the agricultural markets, their agricultural factor was damaged by the agricultural import. It caused the many problems in their society. So their government cannot accept the Cairns Group' s opinions.

But we should know about we can not against the progress of globalization, and we rethink about the agro-trade, and we rethink how to utilize for the benefit direction.

So I tried to consider about nowadays argument about free trade and agricultural factor. Firstly, I would concluded that we cannot think about sustain this system without the trade, and we should think about the nation security of food system on the global economic system.

Secondly, I tried to the research about some the agro-trade case which was benefitly affected in the two countries related agricultural factor. And I research about Korean traditional kimchi food import, how to affect its manufacture of structure. Furthermore, it was exported by the big scale of kimchi manufacturers and the frontier of kimchi export companies. since 1986, the kimchi export set about in this year, the number of kimchi export company added annually until 1999. since 2000, the number of kimchi export company is lessened and reached 89 in 2002. We know about that some company firstly entered to the exportation of kimchi for the image up because of they can cleared serious developed inspection system, even if they cannot get real gains. The exportation market is concentrated in japan market. So I traced the exportation of kimchi route.

In chapter 3, I study on Japanese pickle' s industry how to affected by the increase of imported kimchi from Korea. Firstly, we know about that it is simultaneously increased which the increase of imported kimchi quantity and the product of kimchi by the Japanese pickle' s industries. So we analysis on Japanese pickle' s industries structural changes according to the Japanese industrial census, concluded that main structural change' s accomplished before 1995.
Furthermore, I would conduct case study on the Fukoka-Prefectur' s pickle industries. And I knew about that kimchi producing manufacturer, they affected by the Korean kimchi import and they should benchmark their competition company. And they mainly invested before 1995, they tried to make their original kimchi products or stocked their private brand from kimchi specialized manufacturers. There are big changes distribution system by the big scale distribution company adopted EOS system. It has big impact on this area' s pickle' s distribution system, with the increase of kimchi products.

In chapter 4 , I study on the Japanese agricultural export, especially Nijisseiki Pear' s export system. Some Japanese fresh agricultural products exported in despite of high price and high cost. So I analysis how to it is possible. The Nijisseiki pear' s exportation mainly supported by the prefecture level of cooperative and some town level of cooperatives. they made a system all of the related pear' s producing farmers cooperation. But their degree of participation of prefecture level' s exportation business is separated by their understanding of economic gains, although every town level of cooperative understanding of exportation' s total merits.

（学位第９号様式）

No. 1

学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏　　名	李　錦東
審査委員	主査　佐賀　　大学　教授　　白武義治
	副査　佐賀　　大学　教授　　小林恒夫
	副査　鹿児島　大学　教授　　岩元　泉
	副査　宮崎　　大学　教授　　小八重祥一郎
	副査　琉球　　大学　教授　　仲地宗俊
審査協力者	
題　　目	食料貿易に関する理論的実証的研究 －韓国と日本における厚生効果を醸成する食料貿易－ (The theoretical and empirical research of food trade) (-Food trade could generate welfare effect in South-Korea & Japan-)

本論文は、WTO 体制下、特に問題とされてきた食料貿易に関する理論的実証的研究を行っている。本論文の研究背景には、その食料貿易に対し厚生効果を醸成するものがあるという評価がある。この視点で、韓国と日本を事例に、食料貿易によって両国が現実にどのような影響と効果を受けたのかを明らかにすることが、その貿易を客観的に評価する上で重要であるとみている。

本論文は、第１に、貿易論の学説史的検討を通したグローバル化時代の食料貿易に関する理論的検討を行い、第２に、韓国のキムチ製造業者の対日輸出と当該産業の成長要因に関する実証的分析、第３に、韓国キムチ輸入下の日本野菜漬物業者の市場対応とキムチ流通の変化要因に関する実証的分析、第４に、輸出を続ける二十世紀梨の輸出システムと産地対応に関する実証的分析を行っている。そして、最後に、食料貿易に関する研究結果を総括している。

本論文は、デイヴィッド・リカードによる比較優位説を中心とした多面的な理論的検討を行い、同時に、韓国の首都ソウルと農業地帯の２地域のキムチ製造・輸出業者、九州北部の野菜漬物製造業者、輸出を行う鳥取県内の梨生産地の農協と生産者を対象とする詳細な実態調査に基づく多角的な分析を行っている。その研究成果を列挙すると次のとおりであった。

第１に、比較優位説を中心とした理論的検討を行い、グローバル化時代における農業貿易論の理論的再検討を行った。そして、比較優位説は自由貿易論、保護貿易論の理論的基礎となってきたその根拠を検討し、保護貿易と農業の多面的機能、食料安保論と貿易の関係を検討した上で、一定の農業維持の必要性を明らかにし、さらに以下の実証的研究の視点を明らかにした。

第２に、韓国キムチ製造業者による対日キムチ輸出が当該産業に与えた影響とその成長要因に関する実証的分析によって、キムチ輸出が韓国のキムチ製造業成長の契機となり、当該産業基盤の維持･発展に寄与していることを明かにした。キムチ輸出は、キムチ製造業の成長に伴って、少数業者によって開始され、需要拡大によって多くの業者が参入したが、その業者間輸出競争が激化し、担い手の構造変化が発生した。その後、キムチ輸出は少数の大企業と輸出フロンティアによって大半が担われることになったが、一方、中小企業に対しても検疫システムの厳しい国への輸出が企業イメージアップとなり稼働率の維持向上効果を与えていることなどを明かにした。

第３に、韓国キムチ輸入下の日本野菜漬物業者の市場対応とキムチ流通の変化要因に関する実証的分析によって、次の点を明らかにした。韓国からのキムチ輸入量増加の中で、業者間競争を通して野菜漬物産業における担い手の構造変化が生じ、少数の大規模層の出現と一部家族的零細規模層の廃業が発生したものの大半が中規模層へ上向・収斂したこと、また、韓国産輸入キムチが日本の当該業者による新商品開発へインセンティブを与え、日本独自のキムチ製品製造の誘因と野菜漬物市場拡大の要因になったこと、さらに、野菜漬物総製造出荷額の増加へ影響を及ぼしたことなどを明かにした。

第４に、輸出を続ける二十世紀梨の輸出システムと産地マーケティングに関する実証的分析によって、二十世紀梨の輸出が当該地域の生産者に経済的刺激を与え、農業基盤維持に寄与したこと、また、その輸出システムが地域連携で構築されてきたことと、その要因が農協による産地マーケティングにあったことを明らかにした。

本論文ではデイヴィッド・リカードの比較優位論でいう比較的劣位の農業と関連食品産業部門において、食料輸入が輸入国における農業及び関連食品産業の衰退に拍車をかけるのでなく、寧ろ、食料貿易への積極的な対応がその基盤の維持に寄与すること、農産物輸出を行うことで農業生産基盤維持に寄与して、そのサポートシステムを自ら構築していることを実証的に明らかにした。食料貿易が、比較的優位、劣位の両国において、総じて国民の厚生効果を高めることに貢献するものであることを示した。つまり、本研究は自由貿易論、保護貿易論の理論的基礎となってきた生産性優位なものへ特化して貿易する比較優位論では説明できない実態があり、その根拠を実証的に分析した。この点で新しい知見を加えており、本研究の意義と重要性は高い。そこで、本論文は、博士（農学）の学位論文として十分に価値あるものと判定した。

（学位第１０号様式）

No. 1

最終試験結果の要旨

学位申請者 氏　　名	李　錦東
審査委員	主査　佐賀　　大学　教授　白武義治
	副査　佐賀　　大学　教授　小林恒夫
	副査　鹿児島　大学　教授　岩元　泉
	副査　宮崎　　大学　教授　小八重祥一郎
	副査　琉球　　大学　教授　仲地宗俊
審査協力者	
実施年月日	平成　１８年　１月　１４日
試験方法（該当のものを○で囲むこと。）	口答・筆答

最終試験結果の要旨

上記の主査および副査の5名は、平成18年1月14日の公開審査会において、学位申請者に対して、学位申請論文の内容について説明を求め、その内容および関連事項について試問を行った。具体的には別紙のような質疑応答がなされ、いずれも満足できる回答を得ることができた。

以上の結果から、審査委員会は申請者が博士（農学）の学位を受けるに必要かつ十分な学力ならびに識見、研究能力を有すると認めた。

学位申請者 氏　　名	李　錦東

［質問１］

①本論文の題目に、理論的実証的研究としているが、各章の内容は実証的研究が中心となっている。本論文の趣旨及びテーマからすると、理論的というところは、論文の背景として考えていいと思われるので、検討する必要があるのではないか。

②厚生効果について、具体的な定義の説明が必要ではないか。

［回答１］

①本論文の題目は、ご指摘のように、論文の内容を十分に表せない部分があると思われますが、序章と終章をのぞく本文４章構成の中で、第１章は、今日における一定の国内農業維持への議論を自由貿易保護貿易の観点から議論しております。先生のご指摘は、今後の研究の課題とさせていただきます。

②厚生効果に関しては、本文に詳しく盛り込みます。

［質問２］

①本論文の中で、第３の道ということが表記されているが、それはどのような意味をもっているのか説明して下さい。

②農産物の輸出事例として、キムチの輸出と、梨の輸出を取り上げているが、両者を農産物輸出の代表的な事例として位置づけることができるのか、説明して下さい。

［回答２］

①国内農業を一定維持するための方策として、第３の道という概念をもちいております。本論文の研究対象国である韓国と日本の場合、農業を維持するための政策的選択肢は少ないと思われます。つまり、農業保護のために保護貿易政策をとるか、生産性の高い他産業優先の農産物市場開放策をとるかです。そこで、両国が国内に農業を残すために、海外市場の開拓により国内農業基盤を維持する道、つまり、第３の道を検討する必要があると考えております。

②本論文では、米のように比重が大きい作目や、各国におけるセンシテイヴな作目を検討対象にした方がよかったと思います。しかし、そのセンシテイヴな作目も、日本の場合、極少量でありますが、輸出を行っておりますので、今後の１つのテーマになると思います。キムチと梨の輸出は、今日の両国の農業分野の輸出の典型事例として選び、今後の輸出推進に寄与できればという思いがありました。また、貿易の効果を確めたり、システムの役割を検討するには、適した事例であったと思います。

［質問３］

①本論文は、自由貿易か保護貿易かの極端な議論になっているとみえる。この議論は、各国の

今日の政策とは違いがあり、議論が極端にもみえるが、どう考えるか説明して下さい。

②二十世紀梨の輸出は、競争相手がいない隙間市場への輸出であり、競争相手がいる他の商品の参考事例にならないのではないか。

［回答３］

①ご指摘のとおり、現実の政策は、両極端に存在しているわけでありませんが、議論を明らかにするために強調している面はあります。

②今日の二十世紀梨の輸出は、その主な輸出先が域内の東アジア、特に、台湾と香港が中心になっていますが、ここでは、日本、中国および韓国の三カ国間の競争は激しくなっております。域内には食文化の共通性もありますが、異なる面もあり輸出市場のメリットになります。たとえば、梨の場合、日本国内で選好される大きさや糖度は、台湾で選好されるものと差があります。したがって、日本の梨の輸出は、日本の梨生産者にとって、市場拡大を意味することになります。それも、１つの貿易効果といえると思います。特に、台湾への輸出により、国内市場で、合理的な価格が形成される面もあり、台湾効果とよばれています。

［質問４］

①第３の道とは、保護貿易でもない自由貿易でもない別の道を意味するものか。

②貿易は、国際環境によって変化しやすいものであり、一方、国内市場の方が遥かに大きく重要な意味をもっているのではないか。韓国におけるキムチの輸出も、日本における二十世紀梨の輸出に関しても、極僅かなものではないか。

③リカード理論は、今日改めて議論する意味があるのか。

［回答４］

①本論文における第３の道の意味は、先ほど申し上げましたが、グローバル化の時代、一定の農業を国内に維持する方策として考えております。しかし、韓国・日本の両国は、農業分野保護の主張を強く出せない立場におかれております。それで、今までほとんど議論されてこなかった貿易への積極的な対応、即ち、農業分野の輸出入を通じた国内農業基盤の維持策が、農業を保護しようとするときにかかる費用を削減したりすることができるのではないかということです。

②貿易が、国内市場より大きくなるのは、難しいかもしれません。先生のおっしゃるとおり、国際環境の変化により、輸出ができなくなる可能性もあります。しかし、両国におけるキムチや梨の輸出のケースで示しているように、国内への影響は、無視できることではありません。国内需給を調整するために、どれくらいの割合で輸出ができればいいのか、それに関しては具体的なデータはありませんが、関連業者によると今日の両ケースにおける割合でも、役割を果たしているということでした。国内産業の基盤を無視しようとする意見ではありません。

③リカードの比較優位論がいうように、確かに、両国が極端に１つの産業に特化することはあ

りません。しかし、リカードの貿易に関する説明は、現在なお、その意味をなくすことはないと思います。以上です。